

実践報告

札幌市立西岡北小学校

(1) 研究内容

研究課題：「学校にアイヌ民族の方を招いて行う体験的学習の研究」

- アイヌ文化について正しい知識を得て理解を深めるとともに、北海道の先住民民族であるアイヌの社会や文化を尊重する態度を養う。

(2) 実践の内容

【実践①】札幌大学ウレシパクラブとの交流について

○ ねらい

アイヌ文化について学習することを通して、アイヌ民族の社会や文化を理解し、尊重する態度を養う。

○ 学習内容

<ウレシパクラブの紹介>

最初に「イランカラフテ（こんにちは）とアイヌ語での挨拶で交流がスタートした。ウレシパクラブの活動内容をパワーポイントで分かりやすく説明してくれた。子どもたちもアイヌ文化の継承の大切さを感じたようであった。また、札幌大学にこのような団体があることを知り、より身近に感じたようであった。



<アイヌ語を覚えよう！>



カルタの読み札の発音や意味を確認した後に、グループに分かれてカルタ遊びをした。カルタ遊びの後は、アイヌ語カルタ三択クイズをした。アイヌの人々の道具や動物の名前など、カルタ遊びを通して学んだアイヌ語が三択クイズとして出題された。答え合わせも正解を伝えるだけでなく、意味を説明したり、繰り返し言ってみたりして、子どもの活動が深まる工夫を行った。



<アイヌの楽器・踊り>

次にムックリの演奏を聴いた。子どもたちは奥行きのある不思議な音色に思わず聴き入っていた。アイヌの人たちの暮らしを思い浮かべながら、興味深く聴いていた。演奏の後は、アイヌ舞踊を見せただいた。「エムシリムセ（刀の舞）」や「チャッピーヤク（雨ツバメの踊り）」などの踊りを披露していただき、学習の最後には、「チャッピーヤク（雨ツバメの踊り）」を学生と子どもたちみんなで踊った。魔払いや楽しみのためなど踊りにはそれぞれ意味があり、踊りがアイヌの人たちの生活に根差していることを学ぶことができた。

今年度も体験的な活動を多く取り入れたプログラムにより、子どもたちにとって印象深い学習となった。「イヤイライケレ（ありがとう）」と挨拶をし、心をつなげて学習を終えることができた。

(3) 研究のまとめ

① 成果

- 連絡調整の窓口が札幌大学インターコミュニケーションセンター（SUICC）とウレシパクラブ（学生）の両方にあるため、運営と内容を整理して調整をすることができた。担当者が変わってもスムーズな連絡調整が可能となっている。
- 継続してこの事業に取り組んでいることから、ウレシパクラブとの交流を教育課程に位置付け、計画的効果的な学習を進めることができています。加えて、単元を通して子どもたちの意欲が高まり、意欲的な学習につながった。交流では、実際にアイヌ民族の歌や踊りを間近で見られたり、体験できたりするのは、他の何にも代え難いと考えます。
- アイヌ民族の方を身近に感じることができ、学生（アイヌ民族）ともとても仲良くなって学習を終えることができた。本校教諭もこの取組や内容への理解が深まっている。

② 課題

- ウレシパクラブとの日程調整が難しい。交流時期が2月であるが、日程調整は年度初め（5月頃まで）に決定しておく必要がある。
- 交流自体は大変有効であるが、年に1度であるため、欲を言えば、数回の交流または連絡を取った学習ができればより理解が深まると考える。
- 単元を見通して授業改善することで、ますます効果的な取組となると考えられる。年度や担当教諭が変わるたびに活動に困ることのないように引き継いでいく必要がある。

③ 提言「人権教育のすすめ」

- 体験的活動は、計画的な学習を前提にしないと学びに結び付きにくくなってしまふ。単元を通して学びを積み上げていくことがやはり大切であると考えます。
- 小中学校が互いに情報交換して連携を広げることが、人権意識を体系的に育てるのに有効である。